

外国人児童生徒を対象としたオンライン学習支援での学生の学び

* 高 橋 亜紀子

The learning of Teacher-Training Course Students
in Online Learning Support for Foreign Schoolchildren

TAKAHASHI Akiko

要 旨

日本の学校に通う外国人の児童生徒は年々増えており、全国の学校の3校に1校の割合で在籍している。しかし、学校では受け入れ体制が十分に整っておらず、担当教員は外国人の子どもへの対応を手探りでやっているのが現状である。そこで、教員を目指す学生に外国人の児童生徒を支援する活動に参加してもらい、子どもがどのような問題を抱えているのか、どのような支援が必要なのかを考えてもらう機会を設けることにした。本稿では、本学の学生が外国人の児童生徒の学習をオンラインで支援するという取り組みを紹介し、学生の記録に見られた学びをもとに、その成果と課題を検討した。

Key words : 外国人児童生徒 (Foreign Schoolchildren)
学習支援 (Learning Support)
日本語学習 (Japanese Language Learning)
教科学習 (Subject Learning)
オンライン支援 (Online Support)

1. はじめに

日本では、深刻な労働不足を解消するために、2019年に外国人労働者の受け入れを拡大した。新たな在留資格として「特定技能」が創設され、配偶者や子どもなどの家族滞在が認められることになった。これに伴い、日本の学校では外国人の子どもが今後さらに増加していくことが見込まれている。文部科学省(2019)の調査から、日本の学校で学ぶ外国人の児童生徒は2018年には約93,000人、このうち日本語指導が必要な子どもは約50,000人で、3校に1校の割合で在籍していることが明らかになった。

宮城県の2018年度の調査によると、13市町村、35校に105人の外国人の児童生徒が在籍している。35校の

すべてに日本語指導を担当する非常勤講師が配置されているわけではなく、母語で通訳できる支援員を派遣してもらうのも容易ではないため、学校では子供や保護者への対応に苦慮している。

外国人の児童生徒が増えているにもかかわらず、学校では受け入れ体制が十分に整っているとは言えない。その理由として、学校には外国人児童生徒への対応や日本語指導について学んだ教員がおらず、専門的な資質・能力を備えた教員を養成するプログラムも発展途上である(岡崎,2019)ことが挙げられる。つまり、現場の教員は日本語や教科の指導のほか、文化の違いに配慮が必要な生活指導などに手探りで対応せざるをえないのが現状である。

本学は東北各県にある学校で活躍する教員を多数

* 教員キャリア研究機構

輩出してきた。そのため、本学には東北地方の教員を目指す学生に対して、学校が現在抱えている課題や現状を認識し、それに対する対応の仕方を考える機会を提供することが求められている。

そこで、教員を目指す学生に外国人児童生徒を支援する活動に参加してもらい、子どもがどのような問題を抱えているのか、どのような支援が必要なのかを考える機会を設けることにした。本稿では、本学の学生が外国人の児童生徒の学習をオンラインで支援するという取り組みを行い、学生の記録に見られた学びをもとに、その成果と課題を検討する。

2. 外国人の子どもを支援する活動への協力

仙台市内で外国人の子どもの日本語や教科の学習を支援する活動を行っているのは、「さっと日本語クラブ」、「外国人の子ども・サポートの会」、「日本語を母語としない小中学生のための夏休み教室」である。筆者はこの3つの活動に本学の学生を毎年20～30名程度ボランティアとして派遣する形で支援を行ってきた。

このうちの1つ「日本語を母語としない小中学生のための夏休み教室」は、公益財団法人仙台観光国際化協会（略称、SenTIA）が主催する事業である。この教室は2019年で10年目を迎え、毎年参加している子どものほか、来日したばかりで、平仮名やカタカナが読めない子ども、日本語の日常会話を勉強したい子ども、簡単な会話はできるが、学校の勉強にはついていけず、宿題を手伝ってほしい子ども、学校の勉強にはついていけるが、語彙力や読解力、作文能力、理科などを更に高めたい子どもなど、幼稚園から中学生までの幅広い年齢の子どもが参加している。このように多様な子どもたちが参加するため、教室では1対1での個人指導を行っている。指導は子どもの指導経験が豊富なボランティアと大学生（本学の学生を含む）である。

今年は新型コロナの影響で対面形式での実施が難しいため、SenTIA からオンラインで開催できないかという相談を受けた。そこで、これまで通り本学の学生が外国人の子どもと実際に触れ合う機会となるのはもちろんであるが、学校でもオンラインによる指導が行われていく可能性もあるため、SenTIA と共催でオンライン形式の教室を開催することにした。

3. 「オンライン教室」の概要

3. 1. 教室の企画と役割分担

オンラインによる教室の開催は、SenTIA にとっても、本学にとっても初めての取り組みである。そこで、期間・時間を短縮し、試行的に実施することにした。ただし、これまでの夏休み教室の柱である「個別指導」はそのまま継続することにした。教室の概要は表1の通りである。

表1 教室の概要

日時：2020年8月5日、7日の2日間、14:00～15:00
対象：小学生から中学生程度の外国につながる子どもで、学習支援を希望するもの
方法：オンライン会議システム“Zoom”を使用したオンライン教室
内容：子どもと学生ボランティアをオンラインでつなぎ、子どもの日本語や教科学習の支援を行う

日時は、仙台市立の学校が夏休みに入る前の週で、午前中で授業が終わる学校が多いので子どもたちも参加しやすいだろうと考えて設定した。対象を「外国につながる子ども」としたのは、外国籍の両親を持つ子どもだけではなく、日本人と国際結婚をした家庭の子どもや、両親が日本人でも海外で生活していた子どもなど、様々な背景を持つ子どもたちを想定したからである。方法にはオンライン会議システム“Zoom”を利用することとし、SenTIA がライセンス契約を行った。内容は子どもが希望する学習内容を中心に個別に支援することとした。

オンライン教室の運営にあたって両者の役割を決めた。本学では学生ボランティアの募集と当日の教室運営を担当した。SenTIA は、参加する外国につながる子どもの募集、参加する子どもや保護者とのやりとり、オンライン会議システムの手配・操作、広報を担当した。

3. 2. 参加者

学内のポータルサイトで全学生向けに7月23日に募集メールを送信し、締め切りを7月30日とした。参加者は学生が12名で、外国につながる子どもは11名となった。

学生（S1～S12）は、表2に、学年、性別、コース・

専攻、外国人に対する日本語教育に関連する講義を受講した経験、外国人児童生徒に関連するボランティア経験の有無、学校でのボランティア経験の有無、1日目及び2日目の参加の有無を示す。有は「○」、無は「×」または斜線で示している。

外国につながる子ども（L1～L11）は、表3に、性別、年齢、学年、国籍、日本語力（自己申告）、学校の勉強で困っていることを示す。国籍は、国名から個人が特定される可能性があるため、外国または日本とした。「日本」には、両親のどちらかが外国籍、海外から帰国して日本語が十分にできない子どもが含まれている。また、学生の担当者（1日目、2日目）もあわせて示す。これ以降、外国につながる子どもは「子ども」と記す。

3. 3. 実施までの準備

3. 3. 1. 共有ドライブの作成

学生12名のすべてが2日間参加できるわけではないため、情報が共有できるようにGoogleに共有ドライブを作成した。ドライブの中には、子どものリスト、学生のリスト、2日間の教室で行う内容と担当する学生向けの支援のヒント、それぞれの子ども用のファイルを用意した。ファイルには、子どものプロフィールとバックグラウンド、保護者からのメッセージ、子どものことをよく知っている「さっと日本語クラブ」の担当者からの情報などを記載した。これらの情報を見

ることによって、学生が担当する子どもの様子などを事前に把握できるようにした。

また、学生には教室終了時に子どものファイルに以下の情報を記入してもらった。これにより、子どもを担当する学生が1日目と2日目で異なる場合でも引継ぎが可能となる。また、学生が子ども支援の活動の中で、どのようなことに気づき、学んでいたかを知るためのデータとして用いる。

- (1) 今日やったこと（活動内容）
- (2) 子どもの様子
- (3) 勉強したいこと・困っていることなど
- (4) 次回のクラスでやったほうが良いこと
- (5) 注意点など
- (6) 今日の感想

3. 3. 2. オンライン会議システムへの接続確認

オンライン会議システムに問題なく接続できるように、接続を確認する時間を設けた。SenTIAの担当者が8月3日の午後に2回（各1時間）、接続確認のためのミーティングを行った。学生には2回のうち都合のいいほうの時間帯に参加するように依頼し、ほぼ全員が参加した。このミーティングを行ったことで、SenTIAの担当者与学生とがオンライン教室の前に顔合わせをすることができた。

表2 学生の参加者

	学年	性別	コース・専攻	講義の 受講経験	外国人児童生徒 ボランティア経験	学校関連 ボランティア経験	1日目 参加	2日目 参加
S1	4	男	国語コース	○	×	○	○	○
S2	4	男	社会科教育専攻	×	×	○	○	○
S3	4	女	社会コース	○	○	○	○	○
S4	4	女	社会コース	×	×	×	○	○
S5	4	男	保健体育専攻	×	×	×	○	×
S6	4	男	数学科教育専攻	×	×	○	○	×
S7	4	女	国語コース	○	○	○	×	○
S8	4	女	英語コース	○	○	○	×	○
S9	4	男	国語科教育専攻	○	×	○	×	○
S10	3	女	理科コース	×	×	×	×	○
S11	2	女	家庭科コース	○	○	○	○	×
S12	1	男	理科教育専攻	×	×	×	○	×

表3 子どもの参加者

子ども	性別	年齢	学年	国籍	日本語力 (自己申告)	学校の勉強で 困っていること	1日目の 担当者	2日目の 担当者
L1	女	6	小1	外国	上手に話せる	読むこと	S11	筆者
L2	女	8	小2	外国	あまり話せない	日本語	S12	S10
L3	女	8	小2	外国	上手に話せる	なし	S3	S3
L4	女	9	小3	外国	あまり話せない	日本語	S4	S4
L5	男	8	小3	日本	上手に話せる	読むこと	S4	
L6	女	10	小4	外国	あまり話せない	なし	S5	S8
L7	女	11	小5	外国	上手に話せる	漢字	筆者	
L8	男	13	小6	日本	あまり話せない	読むこと	S1	S9
L9	男	12	小6	外国	あまり話せない	漢字、ことば	S2	S2
L10	女	13	中3	外国	あまり話せない	日本語と歴史	S1	S1
L11	女	14	中3	外国	あまり話せない	なし	S6	S7

3. 3. 3. 学生の事前準備

学生にオンライン教室に主体的に関わってもらうため、1日目の教室で実施するアイスブレイクのゲームを考えてもらうことにした。あまり難しい言葉を使わなくてもできるゲームを考えるように依頼した。

学生からは一人一文字で言葉を作る、あるテーマについて30秒～1分程度話すなどのアイデアが出たが、語彙がわからないと答えられないものがあるため、言葉に頼りすぎないゲームで、できるだけやさしい言葉を使うようにと助言した。

3. 3. 4. 学生向けの支援のヒント

参加学生の半数は、外国人児童生徒に関する講義を受けたことも、接したこともない。そのため外国から来た子どもと接するにあたっての心構えとなる「やさしい日本語」についての情報を用意した(表4)。

このほか、初回に子どもとの関係づくりが円滑にできるように、子どもに聞く質問のサンプル(名前、何年生、何年何組、先生の名前は、学校は楽しいですか、など)をいくつか提示した。質問攻めにならないように、自分のことも話すようにアドバイスをを行った。

4. オンライン教室の実施内容

4. 1. 教室の目的

オンライン教室は初めてであるため、1日目の目的は学生と子どもとの関係づくり、2日目の目的は子どもの個別学習支援とした。

表4 学生向けへの支援のヒント

子どもたちと話すときは、やさしい日本語で話してください。みなさんが、お兄さん、お姉さんの気持ちでやさしく接するのが何より大事です。

★やさしい日本語のポイント

①文を短く!

学校で作っている給食って、おいしいよね。
→給食はおいしいですね。給食は学校で作りますね。

②文を長く続けない!

コロナがたいへんだから、学校ではマスクをしたり手をあらったりしているの?
→コロナは大変ですね。学校でもマスクをしますか。手を洗いますか。

③文は単純に!

学校では運動会などの行事がたくさん行われていますか。
→学校では運動会をしますか。
学校ではマスクをしなければなりませんか。
→学校ではマスクをしますか。

④必要な情報を入れる!

明日いくつもりですか。
→あした、●●さんは、行きますか。

⑤小中学生でも分かりやすいような語彙を使う!

⑥できるだけ和語を使う!

以上のようなことに気をつけて、少しゆっくり話せば通じると思います。通じないときは、言い換えたり、絵を見せたり、ジェスチャーを使ったりして、頑張ってコミュニケーションをとってみてください。そうしていると、相手がどのぐらいの日本語なら、分かるのかなというのが、少しずつわかってくると思います。

それから、子どもたちが答えるまで、ゆっくり待ちましょう。答えをちょっと聞いて、子どもの代わりにすぐ答えてしまわないようにしましょう。(待つことはとても大事です)

4. 2. 1日目(8月5日)

1日目は表5のような流れで教室を開催した。

表5 1日目の流れ

13:30	担当者と学生との打ち合わせ (実施内容と役割の確認)
13:55	子どものログイン
14:00	オンライン教室のスタート アイスブレイク(筆者)
14:10	アイスブレイク・ゲーム(学生)
14:25	個別学習(子どもと学生のペア)
14:55	全体でのふりかえり、今日の感想発表 次回の連絡事項
15:00	子どものログアウト 学生の感想、情報共有、次回の予定確認

教室の開催前に、学生、筆者、SenTIAの担当者が教室活動の流れ、各自の役割を確認する時間を設けた。教室の進行は筆者が行った。はじめのアイスブレイクは、「3, 2, 1, 0」で手を挙げてもらうという簡単なゲームである。ネットワーク速度で手があがるタイミングがずれるのを楽しむゲームである。また、誕生日の月で手を挙げてもらい、同じ月の人を探すという簡単なアイスブレイクを行った。

次に、学生の考えたゲームを実施した。学生は自分が担当する子どもに以下の質問から1つ選んでその場で質問をし、答えてもらうというゲームを用意していた。質問は以下の通りである。

- ①おみせをつくるなら、なにやさんをつくる？
- ②おしょうがつのだのしみといえは？
- ③いちどでいいからのりたのりものは？
- ④いま、ハマっているとは？
- ⑤おとうさん、おかあさんのりょうりですきなものは？
- ⑥おきにいのぶんぼうぐ(ペンやけしごむ)をみせて！
- ⑦きらいなものは？
- ⑧もしねがいかなうならなにをおねがいます？
- ⑨じぶんのがっこうのよいところは？
- ⑩むじんとうにいくならなにをもっていく？
- ⑪おすすめのはん、あにめ、まんがは？

ゲームが始まると、子どもが質問に答えられないために中断してしまうことが度々あった。日本語が母語の子どもに聞くのであれば、特に問題がない質問であると思われるが、外国の子どもたちには語彙や文化的

な背景などにも配慮した質問づくりが必要であることに学生も気づいたようであった。

このあと、子どもと学生とのペアに分かれて、個別の学習を行った。1回目は関係づくりが目的であるため、自己紹介や子どもに質問しながら話すなどを中心に行った。

最後に全体に戻り、感想を話してもらった。次回は自分が勉強したいものを持ってくるようにと子どもに指示した。

教室の後で、30分程度、学生一人一人が実際に行ったことや感想を共有し、次回の予定を確認した。学生は担当した子どもの記録を共有フォルダ内のファイルに記入した。

今回は個別学習の支援であるが、何を準備したらいいのか学生が困らないように、個別指導のアイデアをいくつか紹介した。話す練習(小学校高学年~中学生向け)にはマンガを用いたストーリーテリング、文字や漢字学習(小学生向け)にはウェブ上教材、海外にいる子ども(小学生)には母国の教育事情の紹介などである。

4. 3. 2日目(8月7日)

2日目(8月7日)は表6のような流れで実施した。

表6 2日目の流れ

13:30	学生との打ち合わせ (実施内容と役割の確認)
13:55	子どものログイン
14:00	オンライン教室のスタート 子どもの様子の確認、ペアの確認
14:10	個別学習(子どもと学生のペア)
14:55	全体でのふりかえり、今日の感想発表
15:00	子どものログアウト 学生ふりかえり、情報共有

2日目も始まる30分前に学生と教室活動の流れ、各自の役割分担について打ち合わせを行った。2日目は個別学習として、子どもの勉強したいことを支援することを確認した。

この日は全員で顔合わせをしたのち、学生と子どものペアを確認し、個別学習を行った。最後に全体で集まり、感想を話してもらい、手を振ってオンライン教室を終えた。

この後、学生と個別学習についての情報共有を行っ

た。学生には共有ドライブ内の子どものファイルに記録を残してもらうとともに、オンライン教室についての事後アンケートにも回答してもらった。

5. 学生の記録に見られた気づきや学び

ここでは学生がファイルに記録したデータを示し、その中に見られた気づきや学びを分析する。データ中の個人情報に関する部分は除いた。下線は筆者が引いたものである。

5. 1. S1

S1は1、2日目ともにL10を担当した。下線は筆者が引いたものである。

(1) 1日目の記録

英語を用いて日常会話をした。好きな科目や休日の過ごし方、日本に来た経緯などを中心に会話をした。私がした質問に淡々と応えてくれる様子だった。初めはネット環境や、私の発したことばの意味が分からず、悪いリズムの会話だった。しだいに質問によっては反応が笑顔を見せ、楽しそうに会話をしている場面もあった。最後には私の英語交じりの日本語での質問にあまり聞き返すことなく受け答えができた。日本語を用いた会話、とくに speaking が苦手だということだった。会話の中で日本語で自己紹介を頼んだが、難しいからやりたくないと言われた。先生が言うように何か課題があると進めやすいと思った。日本語の勉強にそこまで意欲的ではなさそうだったので、無理に日本語を使うというよりは普通の勉強の中で本人が進めたいものや助けが必要なものを行うのがよいと感じた。日本語の使用にこだわるのではなく、本人が居心地の良い空間にしてあげることが今後にも必要だと感じた。

想像よりもずっと英語を使った会話だったので、むしろ僕が英語での会話練習をさせてもらったという形になった。L10が日本のマンガやアニメ、テレビを見ないということと、私の英会話力の問題もあり、共通点を見つけて話を進めていくことに苦労した。楽しく会話というよりはインタビューのようになってしまい、L10にとって辛い時間にならなかったかどうか心配である。

(2) 2日目の記録

日本語で会話することに挑戦した。日本語に抵抗があるようで、特に話すことに一番苦手意識を抱えてい

る様子だった。個別ルームの中で「少しだけでもトライしてみよう」と伝えると、簡単な自己紹介を日本語でしてくれた。前は名前すら言いたくないと言っていたので少し気持ちが前向きになったかと感じた。日本語の間違えを恐れず話すような姿勢がもっと身につくと上手になっていくと思った。リラックスした状態で、出来る限りL10にとってストレスの少ない雰囲気作りが大事だと感じた。

1日目のオンライン学習があまり上手いかなかった。そこで今回は少しでも日本語を使う機会を設けようと意気込んでいたが、L10自身の気持ちと私の気持ちにギャップがあり日本語を使いたいとは思っていない様子だった。中学生という時期もあるようで上手く日本語が話すことが出来ない自分の姿が恥ずかしいと感じているように思った。もっと時間をかけてL10と他愛もない会話を気楽に出来るくらいまで信頼関係を築いてから日本語の練習をしたいと思った。マンツーマンで学習を進めていくという点ではすごく良いアイデアだと思った。子ども達が楽しそうな表情を見せてくれていたのが本当に参加してよかったと思える瞬間だった。

以上の記録から、S1は1日目にL10が日本語での会話に苦手意識をもっていて、話したがらないことに気づいた。S1は居心地のいい空間づくりが必要だと考え、2回目は少しでもいいからトライしようと声をかけた。L10が中学生という年頃でもあり、ストレスなく話せる雰囲気を作ること、そのための信頼関係構築が必要との言及が見られた。

5. 2. S2

S2は1、2日目ともにL9を担当した。

(1) 1日目の記録

学校は楽しい、勉強は楽しい、難しくない。理科やパソコンが好き。将来の夢は未定。算数は苦手だが、好き。現在は分数の引き算、掛け算、割り算をしている。日本語の新聞(ふりがながついている)を父や妹と読んでいる。家でたまに父や妹と日本語で会話する。現在は自国にいて、コロナで外にはあまり行けない。自国の好きなところは楽しいこと。幼稚園、保育園、学校は昼寝の時間がある。日本は便利なところが好き(コンビニやスーパーが家の近くにある)。日常生活は8

～9時に起きて、12時に寝る生活、朝に運動している。それ以外は勉強をしていることが多い。家の目の前にコーヒー屋さんがあるが音楽がうるさい。行ってもつまらない。

以上のように、たくさん話してくれる。難しい話になると「分からない」と言う。自分から話をしてきたり、質問してくることは少ない。日本語は上手。次回はもっと日本語で話したいと言っている。例えば、本を読む、漫画の紹介など、話題をいくつか準備しておいた方がいい。

初めて日本語を母語としない子どもに対するボランティア活動を行ったが、とても楽しかった。オンラインの難しさも感じたが、子どもたちは楽しそうに話をしてくれてとても嬉しかった。

(2) 2日目

話中心で、自国には友達がいなくてつまらないので、早く日本に帰りたい。来年から中学校、テストで100点取りたい、部活動とかあまりわからない。ニンテンドー switch、スマホ、パソコン、パソコンのマウスが欲しいが、値段が高いから買えないと少し元気なさげに言う。習い事やお父さんの宿題が大変、算数はやめた。日本語や英語も少しやめたい様子、頭よくなれるか不安、自国ではスマートテレビでゲーム実況のYouTubeや天気予報を見ている。

以上のようなことを基本的には明るく話してくれたが、勉強の話や将来の話の時は少し元気なさげにうつむきがちで答えている。不安があるように感じた。特に、いつになれば日本に帰れるのかが不安そうであった。関係性があまりない状況だった為、あまり踏み込むことができなかつたが、話したくないことや不安に思っていることが話題に出ると態度や様子に出るため、そこに注意したほうがいい。

二日間という短い期間だったが、日本語を母語としない子どもと関わる経験をするのができてよかった。子どもはみんな楽しそうに話してくれるが、不安を抱えている部分もあることが実際に分かったので、そういった精神的なケアも行っていけばいいなと思った。オンラインで行うことを経験していけば、より充実した活動ができると思うので、続けていきたい。

以上の記録から、S2は新型コロナで日本に戻れず、母国にいるL9と様々な話ができていた。L9はS2の質

問には答えるが、自分から話す、質問することはなく、難しい話も分からないことに気づいた。2日目にはL9が勉強や将来の話になると元気がなくなり、不安を抱えているように感じた。しかし、L9との関係が十分に構築できていないため、踏み込んだ話はできなかった。S2はL9の日本語でのコミュニケーションの課題に気づき、心理的な不安への配慮も必要だと述べている。

5. 3. S3

S3は1、2日目ともにL3を担当した。

(1) 1日目の記録

自己紹介を兼ねて質問した。好きな教科や食べ物、学校に関する事など。また、2年生の漢字を書く練習をした。L3は伝えたいことを頭の中で整理しながら話しをしているように感じた。自分の意見をはっきり言える人だという印象を受けた。また、褒めると非常に嬉しそうにしていた。習った漢字を忘れやすく、書こうとした時に思い出せないことがある。既習漢字を中心にL3が希望する教材(教科書等)を使用した学習をやった方が良く思う。

全体的に自分の発話が多かったため、次回はL3から話し出しやすい雰囲気を作っていきたいと思う。学校のことについて質問した際に、頭の中で考えていたためか話し始めるのが遅かったので、改めて「待つ」ことの重要性を身をもって感じた。

(2) 2日目の記録

夏休みの宿題をやった。国語は漢字、算数は長さの測り方を勉強した。L3は口に出しながら問題を解いており、ヒントを出すと「あ、そういうことか!」と自分で気づけていた。国語の漢字は全問正解だったが、算数のmmからcmに直す問題や長さの差を引き算で求める問題は「わからない!」と言っていた。本人からは言われていないが、算数が少し苦手なようである。夏休みの宿題を1日分ずつ国語と算数をセットで進めているようである。

前回の反省を踏まえ、質問をしたら答えが返ってくるまで「待つ」ことができた。今回はL3から積極的に問題について質問してくれたため、ピンポイントに教えることができた。漢字について「完璧じゃん!」と声をとても嬉しそうにしていたので、子どもと接する際は褒めることを大切にしていきたいと思った。

以上の記録から、S3は学習支援をする中で、L3の学習の方法や好みに気づいた。また、L3が日本語で話し出すまでに時間がかかるため、それを待つことの必要性を感じていた。2日目は1日目の反省を生かし、待つことを実践し、L3が好む方法で学習が進むように支援を行っていた。S3は子どもの個性を見出し、それに合わせた指導を心掛けていた。

5. 4. S4

S4は、1日目はL4とL5の2名、2日目はL4を担当した

(1) 1日目の記録

日本語での会話を中心に行った。好きなもの、嫌いな食べ物、夏休みの予定、学校は楽しいか、また学校で何をするのが好きかなどたくさん話げできた。また、自分の名前を漢字で書いてもらい、見せてもらった。L4はとても落ち着いていて、私が投げ掛けた質問をしっかり聞いて答えた。私と別の子が話しているのを聞いて笑っている様子もみられたので、人の話をしっかり聞くことが出来る子なのだと感じた。自分の名前を漢字で書くことができるか、という質問では、難しい漢字も正しくきれいに書くことができていた。その際、私の名前も紙に書いて見せたが、私の名前を見て自分のノートか何かに書きとっているようだった。L5は自分から話をどんどんしてくれる子で、日本語で自分の好きなものを紹介してくれた。私から話を振るばかりでなく、L5の方からも話しかけてくれた。私とL4が話しているのを聞いて、リアクションをとったり、会話に参加しようとしている様子がみられた。日本語を使いこなし、積極的に話そうとしていた。

今回はL4がどれくらい読み書きができるか把握しきれなかった。学校で困っていることがあるかは分からなかった。L4は漢字の勉強、小学校2年生が学習するような漢字の勉強を中心に行うのが良いと思う。L4がどれくらい漢字を習得しているかを最初に確認し、それに合わせて学習を進めていく必要があると思う。L5も学校や日常生活で困っていることが何かを把握することが出来なかったが、困っていることを確認し、勉強を見てあげる時間を多めにとった方が良いと思う。L5は積極的に会話してくれるのは嬉しいが、L4と話している時も話しかけてくれることがあるので、L5と別の子を一緒にするときにはもう一人の子をおろ

そかにせず、3人で会話することを意識した方が良いと感じた。

一言で言うと、とても楽しかった。私は外国人の方と関わる機会がこれまでほとんどなかったので正直不安だったが、L5が積極的に会話してくれたので、徐々に緊張がほぐれ楽しんで会話をすることができた。また、日本語の上手さに驚かされた。しっかり私の話や質問を聞いて的確に答えてくれたり、自分の名前も漢字で上手に書いてくれたりして、外国人の子どもを相手にしているということを忘れてしまうほどだった。本当に日本語べらべらで、びっくりした。一番印象的だったのは、L4が自分の名前を漢字でかくことができていたことだ。小学校1年生レベルの漢字を書くことができるのは知っていたが、画数が多い漢字も正確に書くことができていたのには驚かされた。L4が頑張って漢字の勉強をしたのだなということが伝わってきた。また、小学校3年生とは思えないくらい落ち着いていて、私の話をしっかり聞いてくれていたのが嬉しかった。たくさんお話することができて楽しかった。本当に楽しくて、時間があっという間に過ぎた。次回は漢字の学習を中心に行う予定だが、事前に準備をしてL4の力になれるよう頑張りたいと思う。

(2) 2日目の記録 (L4のみ)

L4から、漢字の勉強がしたいとの話があったので、小学校2年生で学習する漢字の練習を中心に行った。最初に、1年生で学習する漢字を簡単なゲームを使って軽く復習した。その後、Web上で種類・分野別に各学年の漢字の勉強が出来るサイトを画面共有しながら1文字ずつ、読み・書きを行った。今回はいきものに関する漢字について学習した。そして最後に、今回学習した漢字の読み・書きのテストを行い、間違っていたところの復習をした。ほとんどの時間を勉強に使ったが、集中力を切らすことなく、最後まで漢字の勉強に取り組んでいた。最後に行ったテストもほとんど正解で、間違ってしまったものも、しっかりと復習している姿が見受けられた。私の話を最後まで聞いて行動することが出来ていた。漢字の勉強が難しいと言っていた。引き続き、2年生で学習する漢字の練習を中心に行うことだ。一度にたくさん行うのではなく、数回に分けて行い、その都度定着度テストに取り組みせる方が良いのではないかと感じた。

オンラインならではの問題だが、とめやはねなど細

かい部分までL4が正しく書けているか見ることが出来なかった。細かい部分まで正しく書くことができていないか、L4にも協力してもらって確認する必要があると思った。

L4担当の2日目。1日目はフリートークで終わってしまったので、今回は最初から漢字の勉強に取り組んだ。用意した1年生の漢字を使ったゲームも難なくクリアしていたし、前のめりになって取り組んでくれたのが嬉しかった。2年生の漢字の学習では、画面共有して読みや書き順を確認しつつ進めることができた。1文字ずつ読みや書き順などを確認しながら進めていったが、どの字も丁寧にかつスピーディーに書きとることができていて驚いた。私が作ったテストではほとんど満点に近い点数で、L4の漢字の吸収力に感心した。全体を通して、L4の集中力がとても高く、時間があっという間に過ぎていくように感じた。もう少し時間があつたらもっとL4と一緒に勉強できたのに、と少し残念に思った。今回で夏休み子ども教室は最後になるが、日本語を母語としない子どもと関わって一緒に勉強したことを今後の私の教員人生に活かしていきたいと思う。また、改めて勉強を教えるということの楽しさや喜びを感じる機会になった。今後も、子どもたちと関わったり勉強したりできる機会があつたら是非参加したいと思う。

以上の記録より、S4は外国の子どもと初めて接し、日本語で話せることや漢字が書けることに驚いていた。L4とL5の2名とのやりとりの中で、個性の違いにも気づいていた。2日目はL4の漢字学習を支援するため、ゲームやウェブサイトを利用し、漢字が覚えられたかどうかを確認するテストや復習も用意していた。オンラインによる漢字学習の問題点も指摘しているが、短時間で学習が効果的に行えるように工夫した指導を行っていた。外国人の子どもと関わることの楽しさや勉強を教える喜びなども感じていた。

5. 5. S5

S5は1日目のみ参加で、担当はL6である。

(1) 1日目の記録

話をしたが、こちらからの質問に答える形がほとんどであった。緊張していた。しかし後半にはよく笑うようになっていた。漢字が難しいとのことだった。と

くに本人からの要望はなかった。特に要望がなければ話で良いと思う。音声がお互いに聞こえない時があった。

楽しかった。向こうが緊張しているようだったので笑顔でいることと、ジェスチャーを多用することを心掛けた。効果はある気がする。親指を立ててGOOD!などマネするようになっていたし、こちらが緊張を緩和させてあげられるような工夫が必要だと感じた。

以上の記録から、S5はL6が日本語の質問に答えるだけであることに気づき、楽しく話せるように笑顔やジェスチャーで緊張を解く工夫を行っていたことが分かる。

5. 6. S6

S6は1日目のみ参加で、L11を担当した。

(1) 1日目の記録

基本的に身の回りについての話、学校のことや日本のこと、好きなことについて話をした。基本的に難しい日本語でなければ会話可能。中学3年生だが、結構大人な感じ。かといって無口なわけでもない。こちらが質問すればかなり答えてくれる。分からないとき、答えが特に思いつかない時もしっかりと伝えてくれる。学校はすごい楽しいわけでもなくつまらないわけでもないらしい。友達と話したりするのは楽しいが、勉強が難しそう。特に日本語、歴史に苦手意識を持っており、嫌いな教科は歴史。好きな教科は体育で体を動かすことが好き。日本が好きで、お寿司をおいしいと言っていた。好きな音楽は特にないらしい。日本のアーティストもあまり聴かないそう。絵を描くことが好きで、Queen、The BeatlesのCDのジャケットを書いたものを見せてくれた。かなり上手かった。学校の日本語では漢字を勉強しているらしく、自分の名前を漢字で書いてくれて、字もきれいだった。困っていることは特になさそう。勉強したいことを詳しく聞くことはできなかったが、たぶん日本語に触れる機会が欲しいのではないかと思う。こちらから提示するというよりは、何か勉強したいことあると聞いてみてもよいと思う。今回は、一つの話題が深まるというよりは、浅く広くのような感じだったのでできれば一つのことについて詳しく聞くのもありだと思う。また、本人がどんなことを望んでいるのか、どんなことをしたいか

を聞いてもらおうと今日とはまた違った活動ができるのではないだろうか。L11に限った話ではないが、あまりうまく伝わっていないと感じた時は違う言葉に言い換えるとよいと思う。そんなに気負う必要はなく、兄弟のような感じで接するとすぐに打ち解けることができるのではないだろうか。担当者が変わって、最初からになってしまうのであまり深くは話せないかもしれないが、楽しく喋ってみてほしい。

初めての、外国の子どもと接する場だったのでかなり緊張していたが、思ったよりもコミュニケーションも取れ、自分も勉強になったし何より楽しかった。オンラインでやることはかなり難しいことだと思うが、数をこなしてより楽しく充実したものにしてほしい。これからの学校現場では、外国の子どもがクラスにいることも当たり前になってくるだろうし、こういったボランティアや活動がもっと広まるとよいと感じた。日本語の勉強、といっても私たちは日本語の勉強をしたという意識はない(国語と日本語は違う気がする)外国の子どもがどのように学んでいるのか、どういうことをしたらいいのかが分からないので、具体的なやり方の例や一度日本語教室などの見学を設けるなどの工夫をすると、より内容の濃いものになるのではないだろうか。また機会があれば、参加したいと思う。

以上の記録から、S6は外国の子どもと接するのが初めてで緊張しながらも、中学生のL11から非常に多くのことを聞き出し、楽しく会話をしていた。S6は外国人の子どもが学校にいることを想定し、日本語学習支援の必要性も考えていた。

5. 7. S7

S7は2日目のみ参加で、L11を担当した。

(2) 2日目の記録

簡単な自己紹介。「さっと日本語クラブ」でもらった漢字プリントの意味を知らない言葉について、意味を教えた。最初は物静かなのかと思っていたが、話しているうちに笑顔を見せてくれた。2019年に日本に来たと言っていたが、日本語での意思疎通も図れた。学校では英語、家では母語で話しているとのことだった。今は英語の勉強を頑張っているようだった。勉強への意識は高いように感じた。英語と数学の勉強をしたい

といったが、使用している教材が母語であったため、教えることができないと判断した。漢字の勉強では画数が多いものは難しいと言っていた。意味は英語で説明すると、すぐに伝わった。卒業式や学級委員の意味が分からないと言っていたが、説明したところ、母国にも同じようなものがあるとのことだった。英語や数学の勉強がしたいと言っていたので、教材を工夫して教えることができれば良いのかなと思う。漢字も、継続して学習できれば良いと思う。難しい言葉は用いず、比較的簡単な言葉でお話するのが良いと感じる。

私はL11の国が好きなので、話ができ率直に楽しい時間だった。もっと話を掘り下げようかなとも思ったが、時間的に短く切り上げてしまったのが悔やまれる。学習面に関してはすごくやる気があって良いと思った。これからも継続して漢字の学習を頑張ってもらいたいと思った。漢字の意味を教えるときに、先に述べたが、「卒業式」や「学級委員」が母国にもあるのすぐに伝わったが、そもそもそれがない地域で育った子に伝えるにはどうすべきか考えさせられた。個人的には絵ややさしい日本語で伝えるのが良いのかなと思う。卒論で「やさしい日本語」について書いているが、実際に使う機会があって良かった。今日のような機会が増えれば、「やさしい日本語」や外国にルーツを持つ子どもについて関心を持つ人が増えると思うし、実際に増えてほしいと思う。

以上の記録から、S7はL11の漢字学習の支援を行い、日本語でのやりとりが難しいときには言い換えるなど、工夫しながらコミュニケーションを取っていた。また、やさしい日本語の有効性や日本特有の文化行事などをどのように伝えればよいのかを考えていた。

5. 8. S8

S8は2日目のみ参加で、L6を担当した。

(2) 2日目の記録

自国の言葉・住んでいた場所、日本と自国の季節、夏休みにしたいこと、妹紹介をした。全体的に少し恥ずかしがりながらも、しっかり受け答えしてくれた。分からない言葉があれば、ちゃんと分からないと教えてくれた。基本的な受け答えはできていた。好きな季節を聞いたとき、理由についても答えることができていた。知ってる・覚えてる語彙の数がまだ少ないと感じ

じた。今回であれば、春・秋・花火・ケンカ・おばあちゃんという単語が分からなかった。ちなみに、おばあちゃんはお母さんのお母さんと言っていた。こっちから言い直したり、言い換えたりすると、思い出したような様子がみられた。数の単位が理解できていない。(1回を1枚といていた。)後半、妹が登場した。妹の自己紹介も行ってくれた。前回のGOOD!のポーズが気に入ったのか、妹の手でポーズを作って見せてくれた。話が好きな様子だったので、お話の中で色々なものの名前を出し、勉強していくと負担感なく沢山の言葉を覚えられるのではないかと思った。マイクを使っていたが、時折聞こえない時があった。

前回の反省から、笑顔で接することを心掛けた。シャイな子かと緊張したが、想像以上に沢山お話ししてくれて良かった。マイクの聞こえづらさがあり、スムーズに会話ができなかつたのが少し残念だった。自国の「ありがとう」を教えてくれた。上手く発音できなかつたら、チャットにアルファベットで発音を教えてくれた。機能を使いこなして、驚いた。今日が誕生日だったことを嬉しそうに教えてくれて、私も嬉しくなった。久しぶりに子供の無邪気さに触れ、幸せな気持ちになった。とても楽しくお話できてよかった。

以上の記録から、S8は初日に担当したS5の記録を読み、L6の個性に配慮し、笑顔で、楽しく話せるような雰囲気を作っていた。特に、日本語の問題、語彙に関する言及が多く、L6に日本語が伝わるように配慮しながら会話を進めていた。

5. 9. S9

S9は2日目のみ参加で、L8を担当した。

(2) 2日目の記録

日常会話(好きな食べ物、動物、ゲームなど)、会話の中で出てきた言葉の漢字を教えた。少し緊張していたが、色々なことを楽しそうな表情で話していた。挨拶は出来なかったが、親御さんが画面外にいて、少しわからないことば等を訳して彼に教えていたように感じた。漢字を学びたいと言っていた。日本語にまだ不慣れなようなので、ゆっくり簡単な言葉で彼の関心がある話題を掘り下げていく、「勉強」というよりは「話の練習」をしていくと良いと思う。質問やこちらの話

す日本語が少しでも複雑になると分からなくなるようだ。英語は話せるようなので、具体的な質問をしたいときはこちらが英語で質問をして、それを日本語で答えてもらい、日本語を話す練習をしてもらおうと良いかもしれない。

「日本以外のルーツを持つ児童生徒の支援」「オンラインでの学習支援」というのは初めてだったが、非常に楽しかった。正直、手探りで会話だったので、終始表面的な会話になってしまったが、初回にここまで出来ればまずまず良かったのかなと思う。L8が笑顔を見せてくれたのが、一番の収穫。もし、また機会があれば今度は一つの話に絞って話を掘り下げたり、目標を決めてそれに向かって勉強をしたりしてみたい。貴重な経験になった。

以上の記録から、S9は外国の子どもと初めて接するため、どのような日本語を使えば、コミュニケーションが取れるのか、L8の問題を観察しながら、手探りで会話を進めていた。

5. 10. S10

S10は2日目のみ参加で、L2を担当した。

(2) 2日目の記録

お互いの自己紹介、会話、会話の中で少しだけ漢字と算数の勉強をした。常にたくさん話題について話をしたが、質問に対して一生懸命答えようとしていた。しかし、それが好きな理由(例えば好きな食べ物がおにぎりと答え、なぜ好きなかを問うた時)を聞くとわかりませんと言ってしまう、理由まで答えられなかった。また、「季節」や「国」といった単語を忘れていた部分があった。しかし、それを説明すると、一生懸命聞いてくれる様子が見られた。何の勉強をしたいのか、何の勉強道具を持ってきたのかを質問したところ、何もないと答えたため、たくさん話をしようということで、たくさん話をした。問いかけに対して理解し答えようとしていたので、日本語を頑張って勉強したいと感じていると思われる。今回はL2が勉強でしたいことがなかったこともあり、勉強を教えられなかったので、次回教えてもらいたいことを持参してきたら、教えてあげたい。また、日本語を少し忘れているところが多く目立ったため、話をたくさんするのが良いと感じる。長い会話や少し難し言葉を使うと、「ど

ういう意味ですか?」と聞かれるので、なるべく文と単語を簡単にして話すこと。

これまでこのようなボランティアに参加したことがなかったので非常に緊張したのだが、L2となんとかたくさん日本語で話をしようと、いろいろとメモを取って質問を考えて取り組むことができた。今回は、L2が理由をこたえられなかったため、一つの話題に関して掘り下げて話をできず、また、その理由の説明の仕方でもう話せばいいかを教えられず、一問一答形式で終わってしまったことが少し残念で、力不足を感じた。

以上の記録から、S10は外国の子どもと話すのが初めてで、非常に緊張していたが、L2が質問に答えることはできても理由が答えられないこと、長い会話や難しい言葉のときに日本語が通じないことに気づいていた。そこで、文と単語で簡単に話すという、L2とコミュニケーションが取れるように工夫しながら話していた。

5. 11. S11

S11は1日目のみ参加で、L1を担当した。

(1) 1日目の記録

勉強はせず、ずっと日本語でおしゃべりをしていった。描いた絵・作った作品の紹介、お父さんが日本語を勉強している話、歯が抜けた時の話、いとこの話などをした。L1は自分から積極的に話をしてくれ、さまざまな物をカメラ前にもって来て紹介してくれた。自分のことを聞いてもらいたい、作品を見てほしいという感じがあり、小学1年生らしい、かわいい子だった。途中から緊張がほぐれたようで、目を見開いて大きな声でジェスチャーを使いながら、話をしてくれた。話が急に変わるが多かったが、上手な日本語で話してくれた。小学1年生なので、勉強よりはおしゃべりがしたいという感じだった。特に困っていることはなさそうだ。今日は、ひらがなの練習ができなかったので、次回やっていただけるとありがたい。「ならべる」を「なべらる」、「おととい」を「きのうのきのう」など、たまに少し変なことばを使うことがあるので、自然に直してあげてほしい。

最後に行くにつれてどんどん話が盛り上がり、お話しすることがとても楽しかったので、時間が短く感じ

た。今回だけの参加で、もっとお話ができないことが残念だが、L1も私も楽しめて良かった。

以上の記録から、S11はL1の話したい気持ちを尊重し、聞き役に回っていた。その中で、L1の話す日本語の問題点に気づき、そのフィードバックの仕方についても検討していた。

5. 12. S12

S12は1日目のみ参加で、L2を担当した。

(1) 1日目の記録

お互いの自己紹介、軽くお話、算数の計算、漢字の勉強をした。緊張していたためか、自分から話すことはなかったが、こちらから指示したことには正確に答えてくれた。数や漢字の勉強が得意であったため、その勉強に積極的に取り組んでいた。得意科目だけではなく、本人が勉強したい内容の学習を手伝ってあげること。話していて、わからない日本語も多かったため、できるだけ易しい日本語で話してあげること。

お互い少し緊張し、ごちなくなってしまった部分もあったが、一緒に楽しく勉強することができた。まずは、日本語を通して、仲を深めることが良いと感じた。

以上の記録から、S12はL2との日本語のやりとり問題があるため、やさしい日本語で話す必要性を感じていた。また、人間関係を構築する大切さにも気づいていた。

5. 13. 学生に見られた気づきや学びについての考察

S1～S12の記録から、次のような気づきや学びが認められた。

まず、子どもの日本語に見られた問題点の把握である。質問には答えられるが、理由が答えられない、自分から質問ができない、話すまでに時間がかかる、語彙不足、分からない、日本語が通じないことがあるなどである。

次に、子どもとのコミュニケーションの方法についての学びである。子どもにわかりやすい日本語で伝えること、難しい言葉をやさしく言い換えることなど、具体的なやりとりの中で学んだようである。このほか、文化的な行事などを日本と文化背景が異なる国の子ども

もにどのように伝えればよいのかを考えておく必要性も指摘されていた。さらに、子どもの緊張を解き、話しやすい雰囲気を作ること、子どもとの信頼関係を構築することなどもコミュニケーションに必要な要素だという気づきが多く見られた。

そして、子どもの個性や発達段階に合わせた学習支援のあり方への気づきである。子どもの年齢に合わせて、楽しく学べるように様々な工夫が行われていた。

その他には、不安や悩みを抱えている子どもの心理面に配慮する必要性などへの気づきも見られた。

6. 事後アンケートの結果と考察

学生向けの事後アンケートの回答は8名から得られた。

まず、教室の「開催時間」は「ちょうどよい(5名)」「もう少し長くてもよい(3名)」、「2日間の日程」は「よい(4名)」「2日以上がよい(4名)」となった。「個別学習の時間」は「ちょうどよい(4名)」、「もう少し長くてもよい(4名)」となった。以上より、教室の開催時期、2日間の日程、個別学習の時間はおおむね適当であったと考えていいだろう。

次に、教室への参加についてたずねたところ、「とてもよかった(7名)」、「よかった(1名)」となり、評価が高かった。「参加してよかったこと」として以下の点が挙げられた。

- とにかく子供達の楽しそうな表情を見れたことです。
- かわいい子どもたちの姿が見れたこと。頑張っている子どもたちを見て、自分も頑張ろうと思えたこと。
- コロナ禍の現在における日本以外をルーツに持つ子どもたちの様子がすこし分かったこと。
- 人と関わる良さを改めて感じた。「やさしい日本語」を意識することができた。
- 出来るだけ簡単な日本語を使うように心がけられたこと。
- 母国の文化や言語に興味を示すこと。笑顔。ゆっくり話す。
- 外国の子供が日本語を通じてお話し、外国の学校について聞くことができたこと。
- 私はこれまで外国の子供と関わる機会がなかったの

で、新しい経験を得ることができてよかったです。勉強を教える際も、どのような展開で教えたかわかりやすいかなど考え、子供の様子も見ながら勉強を進めることができたので、自分自身の自信へつながったのもよかったです。

以上より、学生は子どもと日本語でコミュニケーションがうまく取れるように、自分が使っている言葉をコントロールして、ゆっくり話すようにしていたことが分かる。また、子どもの母国の文化や言葉にも興味を示していた。このほか、子どもとの交流を楽しむ、指導を工夫するなどについてもよかったこととして挙げられていた。

次に、「事前にほしかった情報」は以下のようであった。

- 事前に苦手なことや、頑張りたいと思っていることを知っていたのがとても役に立ったなと思っています。
- 前回の方の感想があったので、よかった。
- 今回頂いた情報くらいで十分です(2)。
- 子供がどんな用意をしてオンライン学習に臨んでいるかどうか。
- 個別のルームに入ってはじめて何も用意してないとなると時間ももたないように思いました。
- 子どもたちの興味関心がもう少し詳しく書いてあると話しやすかったですね。
- どんな教科書を使って、日本語の勉強しているのかということ。
- 家族構成

以上より、事前の情報は十分という意見もある一方で、子どもの興味関心や希望する学習内容、日本語学習についても知りたかったという意見があった。子どもの学習状態に関する情報を事前に収集して、支援に役立てていく必要があるだろう。

「オンラインでできる支援」には以下の意見があった。

- 勉強を教えるのは、実際に見本を書いたり、本を見せたりしなければならぬため難しい。だが、日本語のスピーキング力を高めるサポートはできると思う。
- 書くことより、話す・聞くの指導に向いていると思

う。

- 日本語を使って会話することや画面共有を使ってホワイトボードに漢字や式を書いて答え合わせをするサポート等。
- 画面共有を活かしたサポート（例：お互いの好きなものを PowerPoint 等で紹介）
- オンラインならではの画面共有をして一緒に問題を解いたり、テストをして確認したりということができると思う。
- オンラインのほうが気軽に通うことができるので、出席率は上がると思う。出席率が上がるので、定期的に日本語を話す機会が得られると考える。
- 自分の部屋にいながら他人と話すことができるので、悩み相談などに有効だと考えました。

以上から、学生は、話す・聞くの練習や画面共有を利用したやりとりなどがオンライン学習では有効な支援だと考えていることが分かった。また、気軽に参加できるため、悩み相談にも有効だという意見もあった。

最後の「また参加したいか」には8名全てが「はい」と答えた。参加者の感想やコメントは以下の通りである。

- 楽しかったです！
- 定期的に開催してもいいと思いました。
- 貴重な経験ができました。ありがとうございました。
- 最初は緊張していましたが、実際話してみるととても楽しかったです。勉強を教えるのもすごく楽しかったのですが、もっと子どもたちの好きなことやその子の出身国の文化について話を聞ければよかったですと思いました。
- 今回の教室での活動を通して、外国人の子どもへの接し方や、指導の仕方について学ぶことができました。このような活動に参加するのが初めてだったので最初は不安でしたが、いざ子どもたちと関わってみるとたくさんお話できたり、勉強もスムーズに行ったりする事ができたので、とても楽しかったです。子どもたちの勉強をみるということでしたが、逆に私の方が勉強させてもらったなという感じでした。今回のこの経験はとても貴重なものになりました。今後の私の活動に生かしていけるといいなと思います。
- それぞれ個性がはつきりみえて面白かったです。機

会があれば、ぜひまた参加したいです。ありがとうございました。

- こちらとしても気軽に参加出来たのが非常に有り難かったです。1日目のアイスブレイクが少し悔しかったです。充実した1時間でした。まだまだ話したりないことも多かったので、また参加したいなと思いました。今日担当した子にとっても、充実した時間であったことを祈ります。

以上のコメントから、外国の子どもへのサポートが初めてだった学生が緊張しながらも、コミュニケーションを介して子どもへの接し方や対応の仕方を学んでいたことが分かる。また、今回の経験は貴重であると捉えられていた。

7. おわりに

本稿では、本学の学生が外国人の児童生徒の学習をオンラインで支援するという取り組みを紹介し、学生の記録に見られた学びをもとに、その成果と課題を検討した。

学生の記録から、(1) 日本語に見られる問題点の把握、(2) 子どもとのコミュニケーションの方法、(3) 子どもの個性や発達段階に応じた学習支援のあり方、(4) 子どもの心理面への配慮の必要性、などの気づきが見られた。事後アンケートの結果からも、学生の記録で見られた(1)～(4)に対応する結果が見られた。

今回のオンライン教室は、教員を目指す学生に外国人児童生徒を支援する活動に参加してもらい、子どもがどのような問題を抱えているのか、どのような支援が必要なかを考えてもらうことが目的であった。学生の大半は外国人の子どもと接することが初めてであった。学生は子どもと日本語でやりとりをしながら、日本語の問題があることに気づき、わかりやすく伝えるためにどうすればいいかについて体験的に学んでいた。また、子どもとのやりとりの中で、母国の言葉や文化への興味関心も広がっていた。今回は1日あるいは2日間という超短期の体験ではあったが、オンライン教室は学生の気づきや学びを促す上で成果があったと考えられる。

しかし、体験的な学びだけでは、外国人児童生徒の指導における専門的な資質・能力を身につけるには十

分であるとは言えない。文化審議会国語分科会(2018)と公益社団法人日本語教育学会(2020)は、子どもを取り巻く社会的背景、教育施策、特別の教育課程、言語環境、言語使用、言語習得、異文化間能力、多文化共生、日本語・教科指導の方法などの学習が必要であるとしている。

今後は、体験的な学びに加えて、知識を増やすための系統的な学習を組みあわせることで、学生の学びがどのように深まっていくのかを検証するとともに、外国人児童生徒を専門的に指導できるような教員の養成を目指していきたい。また、外国人児童生徒の対応に困っている学校や支援が十分に得られない子どもたちのために、学習支援の活動を学生とともに継続的に実施していきたい。

在り方について(報告)改定版』(平成31年3月4日)

文部科学省(2019)「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成30年度)』の結果について(令和元年9月27日)」

〈https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569.htm〉(2020年9月26日閲覧)

(令和2年9月30日受理)

謝辞

オンライン教室の開催にあたっては、公益財団法人仙台観光国際協会(SenTIA)の国際事業部、堀野正浩氏、須藤伸子氏、武山真紀氏から多大なるご協力を得ました。また、教室に参加した本学の学生、外国につながるお子さん、保護者の皆さんにも心から感謝をいたします。

付記

本研究の一部は、科学研究費交付金(20K20801)の助成を受けて実施したものである。

参考文献

- 岡崎渉(2020)「教員志望学生は外国人児童の指導現場から何を学ぶ」『兵庫教育大学研究紀要：人間発達教育専攻 特別支援教育専攻 教育内容・方法開発専攻 教育実践高度化専攻 附属学校園, 56号, 151-159.
- 公益財団法人仙台観光国際協会国際化事業部(2019)「7/30～8/2 夏休み教室参加者募集」〈<http://int.sentia-sendai.jp/blog/i/i-4340/>〉(2020年9月26日閲覧)
- 公益社団法人日本語教育学会(2020)『外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』〈<https://mo-mo-pro.com/report>〉(2020年9月26日閲覧)
- 志村恵・深澤のぞみ(2019)「多文化共生社会を促進する場としての外国につながる子どもたちへの学習支援」『金沢大学国際機構紀要』, 第1巻, 45-59.
- 文化審議会国語分科会(2018)『日本語教育人材の育成・研修の

